

序

日本の物理療法教育には問題がある。筆者は大学と大学院で物理療法の講義を10年以上担当しているが、熱心に聴講し、興味をもつ学生も多い。しかし、最終学年の臨床実習では、ホットパック、アイスバッグ、牽引療法などの古い一部の物理療法の体験に留まり、その結果、臨床実習終了時には物理療法そのものの必要性を低く考える学生を散見する。新たな多くの研究が報告され、欧米では頻回に使用されている物理療法に関して、“エビデンスに基づいて慎重に選択、実践する過程”を臨床実習で経験していない学生が大半であり、そのまま最終的に臨床家として勤務していることが問題であると筆者は感じている。

したがって、本書では、新たな基礎・臨床研究結果をできる限り取り入れ、物理療法に関係した痛みの生理学と病理学、物理学、関節可動域制限についても図表、動画を使用してわかりやすく解説した。これらにより、エビデンスを伴った体系的な学びができるだろう。また、治療技術の解説、実習方法、運動療法との組み合わせも詳細に記述し、選択、実践する過程をできるだけリアルにシミュレートできるようにした。新たな物理療法として近年多くの現場で導入されている振動刺激を加えている。理学療法士をめざす学生のためには、理学療法士国家試験問題に関係した領域を黄色のアンダーラインでわかりやすく示している。

さらに、臨床でエビデンスに基づく物理療法を積極的に実践している理学療法士、物理療法の研究に卓越している若手研究者に執筆していただき、わかりやすい内容、構成になっていると考えている。この①エビデンス、②実践感、③現場感に基づく構成の3点は、学生の方々はもちろん、これから物理療法を新たに勉強しようと考えている現場のセラピストにとっても、根拠と自信をもって治療にあたれるレベルまで引き上げてくれるものであり、深さも満足できる書籍になったと感じている。

本書によって、エビデンスに基づいて物理療法を適切に実施可能な臨床家や物理療法の研究者が増加し、機器開発メーカーを含めた協働活動がさかんになり、結果的にさまざまなクライアントにより影響があることを祈念しています。

2017年6月

畿央大学健康科学部
庄本康治